

国際研究集会開催報告

科学研究費基盤研究 (B), 京都大学大学院文学研究科西洋史学専修 助成

国際研究集会テーマ:

Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World

日時: 平成 29 (2017) 年 3 月 20 日 (月曜日), 21 日 (火曜日)

会場: 連合王国 (イギリス) オックスフォード市

オックスフォード大学ウルフソン・カレッジ

科学研究費共同研究班代表者 南 川 高 志

(1) 研究集会の経過

科学研究費基盤研究 (B) 「古代ギリシア・ローマ史における新しい『衰退論』構築に向けた統合的研究の試み」の研究成果を発表する国際研究集会の開催は、本共同研究を開始して以来の目標であったが、このほど無事実施することができた。研究代表者として、研究分担者・研究協力者はもとより、報告やコメント、スピーチをしてくださったイギリス、ドイツ、アメリカ合衆国の研究者の方々、出席して討論に参加してくれたイギリスの研究者の皆さん、会場と設備を提供してくれたウルフソン・カレッジとレディー・マーガレット・ホールの関係者の皆さんにお礼申し上げる。また、日本人報告者の報告英文の校閲を担当してくれたオックスフォード大学のマギー・サザナウさんの親切にも感謝する次第である。

研究集会は 3 月 16 日に参加登録を締め切り、3 月 20 日月曜日の午後 2 時より受付を始め、2 時 30 分、研究代表者の開会の挨拶と趣旨説明からスタートした。以下、詳細は本誌 16 号掲載のプログラムと下記のセッションごとの経過報告に譲るが、第 1 日目は第 I 部を午後 6 時少し前までに終了し、午後 6 時から研究集会会場隣のホールにてレセプションを開いた。研究集会のやや堅い雰囲気がとれて、ゆったりとした気分でテーマに関する議論や学術交流を楽しむことができた。報告者・コメンテーター・科研費メンバーは、この後さらに夕食をともにし、交流を深めた。

3 月 21 日、研究集会第 2 日目は 9 時から受付を開始し、9 時 30 分から第 II 部を開始した。議論は尽きず、主立った参加者は別室でランチをともにしながら議論を続けた。午後 2 時から第 III 部を開始し、5 時前に終了、オックスフォード大学名誉教授ファergus・ミラー卿の閉会の挨拶を聞き、研究代表者が謝辞を述べて、全スケジュールを無事終了した。

出席者は、第 1 日目 35 名、第 2 日目は 38 名であった。オックスフォード大学だけでなく、ケンブリッジ大学やロンドン大学のスタッフや大学院生も参加してくれた。エヴリル・

キャメロン名誉教授、ジュディス・ヘリン名誉教授、ジョン・ヴィルクス名誉教授などオックスフォード大学やロンドン大学の名誉教授から、現在博士学位論文を用意している大学院生まで、ギリシア史、ローマ史、考古学、ビザンツ史の研究者が一同に会し、当該テーマについて熱心に議論してくれたことに、会を主催した者として開催の意義を強く感じた次第である。ちょうどオックスフォードに在外研究で滞在中の日本人研究者も4名参加してくれたことにも感謝したい。

会場としたウルフソン・カレッジの Hadane Room には口の字型に机を設置したが、参加者全員の顔が見え、マイクを使わずとも報告・コメント・意見の提示が楽にでき、意見のやりとりにも支障なく、和やかな雰囲気セッションを進めることができたことは有り難かった。

(南川高志)



(2) セッションごとの経過報告

第Ⅰ部 司会 栗原麻子（大阪大学）

第Ⅰ部では、近現代における衰退言説の展開が、同時代における実態や言説とどのように交錯しているのかをめぐって闊達な意見交換がおこなわれた。ヘレニズム評価の変遷を踏まえ、ローマ帝国下のギリシア系ポリスがどのような条件下でバルパロイとみなされたのかを問う長谷川報告、ヘレニズム「衰退」論と現実の植民地統治の経験の不可分の関係を示すエリス＝エヴァンズ報告、ギボン以来の古代末期評価の深化と揺り戻しを丁寧に辿りテクニカルな著作や抜粋が硬直化の現れかどうかを問うフラワー報告。これらの、いずれもニュアンスに富む報告とワード＝パーキンス教授のコメントに刺激されるかたちで、経済・法文化・聖人崇拜の誕生といった対象の多様性、地域差の問題、それに加えて同時代人の意識における「継続」への志向性や同時代の歴史叙述の影響、さらにたとえば名づけのような個人的な領域における変容を議論に含める必要があることなど、終始とぎれることなくやかに議論が交わされた。（栗原麻子）

第Ⅱ部 司会 阿部拓児（京都府立大学）

カンファレンス第Ⅱ部では、二人の日本人若手研究者（岸本・西村）とチュービンゲン大学のミーシャ・マイヤー教授による三本の報告がなされた。個別報告のうち、ティー・タイムをはさみ、オックスフォード大学のキャサリン・クラーク博士よりコメントが読み上げられた。ディスカッションに先立っては、はじめて英語によるプレゼンテーションをおこなった二人の日本人研究者にたいして、その完成度の高さを称賛する拍手が送られ、会はなごやかに進行した。議論の場では、「衰退」概念の柔軟性・可塑性、それとそもそも「衰退」をいかに定義すべきかといった点について、意見が交わされた。討論は盛り上がりを見せたが、最終的にはランチ時間の到来をもって、セッションは終了した。（阿部拓児）

第Ⅲ部 司会 藤井崇（関西学院大学）

古代ギリシア・ローマ世界の衰退・衰退言説を比較史的な観点から扱った第Ⅲ部は、報告、コメント、質疑応答のいずれも、学会の掉尾を飾る充実したものだった。貴族政治を旨とするローマの共和主義とそれに付随した衰退の強迫観念を、共和政期から帝政後期まで通覧したヴァイスヴァイラー報告、主に歴史記述の観点からローマ帝国と中国王朝（漢・魏・晋）を比較した井上報告、古代ユーラシアの諸帝国の衰退についての考古学者の言説を分析したウルフ報告の後、ルシェが古代の衰退言説と現代の衰退言説との相互影響を指摘するコメントをおこなった。質疑応答では、現代の日米欧の政治状況における古代世界の衰退言説の「利用」や衰退言

説におけるジェンダーの問題などが活発に議論された。

(藤井崇)

(3) 研究集会成果報告書の刊行

本研究集会の成果は、以下の書物として 2017 年 10 月に刊行された。

Takashi Minamikawa (ed.), *Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World: Proceedings of a Conference held at the University of Oxford in March 2017*, Kyoto University, 2017, ISBN 978-4-9901929-3-8